

座長：鈴木 亮（東京医科大学 糖尿病・代謝・内分泌内科学分野）

共催：ノボ ノルディスク ファーマ株式会社

LS1 糖尿病治療の変遷とこれからの糖尿病治療

綿田 裕孝

順天堂大学大学院医学研究科 代謝内分泌内科学

本年は、インスリン発見100周年に当たる記念の年である。インスリンは発見されるや否や臨床応用され、糖尿病急性合併症の予後を著名に改善させた。その後、糖尿病治療の主な目標は血管合併症の制御へと変わった。糖尿病薬としてSU剤とインスリンのみが使用可能であった1990年ごろまで、細小血管障害を合併している患者の割合が高く、医師はこの予後を何とか改善させようとして、厳しく食事療法の指導を行う医師も多かった。また、高齢糖尿病の併存症管理にまで目を向けている医師は少なかった。

その後、数々のエビデンスが明らかになり、それに応じた治療薬が開発された。また糖尿病対策により、早期に糖尿病が発見されるようになったことにより糖尿病患者の合併症発症率が低下している。その結果、高齢糖尿病患者の管理をどうするかということが新たな問題となってきた。高齢化に伴い、糖尿病であろうとなかろうと高齢者特有疾患が併発するが、糖尿病患者では非糖尿病患者に比してサルコペニア、認知症、ADLの低下、悪性腫瘍などの併発が高いことが報告されている。したがって、糖尿病を診療する医師は、高齢化で増加する併存症にも目を向けて診療をすることが期待される。

さらに、糖尿病患者のQOLも重視されつつある。糖尿病であることの不利益は高血糖、インスリン抵抗性がもたらす様々な身体の変調に留まるべきであるが、糖尿病患者は精神的にも、社会的にも不利益を被るということが知られている。糖尿病患者がstigmaを感じると、抑うつ的となり糖尿病治療への意欲が失われ、その結果、合併症の発症率が増加することが知られている。したがって、この対策も極めて重要である。

このような背景を鑑み、本講演では、これまでの糖尿病治療の変遷とこれからあるべき糖尿病治療に関して考えてみたい。

略 歴

平成2年3月	大阪大学医学部卒業
平成3年7月	桜橋渡辺病院内科 循環器内科医員
平成8年4月	日本学術振興会特別研究員
平成9年4月	大阪大学大学院修了 医学博士
平成9年7月	米国カリフォルニア大学サンフランシスコ校ホルモン研究所 研究員
平成13年9月	順天堂大学医学部内科学代謝内分泌学講座 講師
平成18年4月	順天堂大学医学部内科学代謝内分泌学講座 助教授
平成19年4月	順天堂大学医学部内科学代謝内分泌学講座 准教授
平成22年6月	順天堂大学大学院医学研究科代謝内分泌内科学 教授
令和2年4月	順天堂大学医学部副医学部長 日本学術振興会システム研究センター専門研究員